

P2-C-0420

維持期脳卒中片麻痺者に対する 1 か月間の杖操作促進課題を付加した歩行練習が歩行速度および歩数に及ぼす即時的効果の検討

橋立 博幸¹⁾, 鈴木 友紀²⁾, 柴田 未里²⁾, 佐野 寛太²⁾, 藤澤 祐基¹⁾, 笹本 憲男³⁾

¹⁾杏林大学保健学部理学療法学科, ²⁾医療法人笹本会おおくに通所リハビリテーション,

³⁾医療法人笹本会やまなしケアアカデミー

key words 維持期・脳卒中・杖歩行

【目的】

本研究の目的は、1 か月間、通所リハで杖操作促進課題を付加した歩行練習を実施した維持期脳卒中者の経過をととして、杖操作促進課題を伴う歩行練習が歩行速度および歩数に及ぼす即時的効果を検討することとした。

【症例提示】

70 歳、男性、平成 15 年 1 月に脳出血右片麻痺を発症し、自宅退院後、平成 24 年 6 月より 2 回/週の通所リハを継続していた。平成 26 年 8 月の時点では、Brunnstrom stage 右上肢 V、右下肢 II、右上下肢表在感覚軽度鈍麻、右上下肢深部感覚重度鈍麻、歩行は短下肢装具を用いた T 字杖歩行が屋内自立レベルで、5m 歩行時間 (5m 歩数) は通常速度 26.1 秒 (32 歩)、最大速度 22.2 秒 (29 歩)、timed up and go test (TUG) は通常速度 53.6 秒、最大速度 45.9 秒であった。平成 26 年 8 月からの 1 か月間、週 2 回の通所リハにて杖操作促進課題を付加した歩行練習 (「杖の先端をできるだけ速く直線進行方向へ出してできるだけ速く歩いてください」と教示して行う往復直線歩行) を 10 分間実施した。毎回の歩行練習実施前と歩行練習実施後において 5m 歩行時間と 5m 歩数を測定し、対応のある t 検定を用いて検討した。

【経過と考察】

通所リハでの歩行練習は 1 か月間で計 8 回実施した。歩行練習実施後 (n=8) は、歩行練習実施前 (n=8) に比べて、通常速度および最大速度での 5m 歩行時間、5m 歩数の値が有意に低かった (p<0.05)。最大速度条件下での杖操作促進課題が身体外部への外的焦点に基づく速い杖操作リズムを形成し、そのリズムに付随して後続する下肢の踏み出しが促進され、即時的な歩行速度向上効果が得られたと考えられた。また、8 回目の歩行練習実施後では、5m 歩行時間 (5m 歩数) は通常速度 20.2 秒 (22 歩)、最大速度 15.1 秒 (21 歩)、TUG は通常速度 46.5 秒、最大速度 38.8 秒であったことから、即時的効果だけでなく、1 か月間の累積的な直線歩行速度改善効果が得られるとともに、TUG のような応用的な歩行課題にも改善効果が波及したと推察された。